

英国におけるKnightとその変遷について

小林 絢子

1. 0 東京家政大学英語英文学会発行「英語英文学研究」第5号(1999年)所載の「イギリス封建制度下における‘alderman’について」において筆者は alderman の定義と英国におけるその社会的地位について述べた。alderman という呼称は古英語時代の終焉と共に廃れ、ノルマン征服後の英国中世では貴族の呼称としては古英語後期からの生き残りである北欧系の earl やフランス系の baron が広く使われるようになった。しかしそれらは今の英語では英国の貴族階級の中の階層区分を示す語としては使われてはいても、貴族全般を示す語ではない。貴族は peer(s) (L pater, par ‘equal’ から)、aristocrat (s) (Gk aristos ‘best’ から) または noble (s) (L nobilis ‘famous, high-born’ <gnobilis ‘knowable’ から) などと呼ばれている。それらの人々と下級貴族には属していたらしい knight との関係はどのようなものであったのだろうか。その事は後述するとして、ここでは先ず私たちがごくふつうに「ナイト」あるいは「騎士」と呼んでいる人々とその呼び名の語源や意味について調べてみたい。

1. 1 周知のように英語の knight は古英語では cniht でその意味は ‘a boy, youth, lad’ であった。⁽¹⁾ 少年や若者を意味する cniht の用例は9世紀のアルフレッド大王訳のオロシウスの「世界史」から10世紀の「ブリックリング説教集」まで見られる。後に cniht の意味は主として ‘a boy or lad employed as an attendant or servant’ つまりお小姓とか召使いの少年(後には少年

ばかりでなく成年男子も指したようだが)となり、その用例は10世紀から13世紀まで見られる。⁽²⁾

このように OE *cniht* は貴族とは程遠く、また日本語の「騎士」という訳から連想されるような「馬に乗った武士」という意味もなかった。Knight は *knave* (OE *cnafa*) や OE *cnapa* と同じように「少年」か「小姓」を意味する単語だったのである。

1. 2 OE *cnafa* や *cnapa* は *rascal* (ごろつき、悪漢) という意味を持つようになり、いわゆる意味の下落を起こした代表的な例である。Bergen Evans は召使いや奉公人を指す言葉は意味の下落を起こしやすかった、と次のように冗談めかして述べている。

Any word that is applied to servants will go downhill. Ten minutes with a dictionary will make it clear to anyone why it is so hard to get domestic help.⁽³⁾

Walter W. Skeat は *cnafa* は *cnapa* の後の形であり、*cnapa* はケルト語源(「少年」の意味)だった、と言っている。⁽⁴⁾ OE *cniht* はそれらとは対照的に意味を上昇させつつ変貌していった。

1. 3 *cniht* という語は Skeat や Eric Partridge によれば、*-iht* を形容詞語尾(例: *stan-iht* 'stony') とすれば *cn-* という語根に中間母音を補って *cyn-* とし、現代英語の *kin* すなわち一族という意味を当てはめることが出来る。⁽⁵⁾ 従って *cniht* は「一族の若者、その種族の若者」という意味になり、この意味ではオランダ語をはじめ、スウェーデン語やデンマーク語など広くスカンディナヴィア語で流布している。ドイツ語の *Knecht* は 'a man-servant' の意味である。

2. 1 「少年」「若者」或いは「小姓」「召使い」を指していた *cniht* はいつごろから「騎士」の意味を持つようになったのであろうか。若者が王侯貴族に仕える場合、戦場に赴く主人に従って騎乗の軍人になっていくことはごく自然に考えられる。はっきりした「騎士」階級の人、という概念はなくても、*cniht* を武士として扱ったと思われる最初の例は「アングロ・サクソン年代記」に見られる。1124年の記述にヘンリー1世がノルマンディーに渡って、その地の自分の領地を脅かすフランス人太守 Warelam と戦う場面がある。(thorn と eth の文字は th に、ash は a にしてある。当該語は斜字体。) mid him ferde thes kinges stiward of France Amalri & Hugo Gerueises sunu, & Hugo of Munford & fela othre godre *cnihte*. Tha comen hem togeanes thes kinges *cnihtes* of ealla tha casteles tha thar abuton waron & fuhton with hem & aflemden hem. ここではワレランの家令のアマルリや他の貴族とまじって *cniht(e)* が対英王戦に赴いたとされ、また迎え撃つヘンリー王の味方も *cniht(es)* だったとされている。それまで王の側近は *thegnes* (*thanes*) であることが多かったのに王直属の武士として *cnihtas* が活躍していることがわかる。

2. 2 このような *cnihtas* は *Oxford English Dictionary* によると

Name of an order or rank. In the Middle Ages : Originally, a military servant of the king or other person of rank; a feudal tenant holding land from a superior on condition of serving in the field as a mounted and well-armed man.⁽⁶⁾

と定義されている。このように *cniht* は単なる小姓から若武者へ、そして戦士へと昇格していった。それはドイツ語の *Knecht* が 古期高地ドイツ語では 'a boy, squire' を意味し、中期高地ドイツ語では 'a man, warrior'

を意味していたのに現代では前述のように‘man-servant’を指すことと対照的である。ドイツ語では「騎士」は Ritter でこれは einen Ritt machen ‘to take a ride’ などの慣用句が示す通り「騎乗する」という意味であった。クネヒト (Knecht) は決して騎乗の武人を指していたのではなかったのである。⁽⁷⁾

フランス語では騎士は chevalier でそれは「cheval (馬)に乗る人」という意味であることはよく知られている。この事は今述べたドイツ語の Ritter とも相通ずる。Hans Kurath 他編の *Middle English Dictionary* では前述の「アングロ・サクソン年代記」に出てきた cniht の初出例について、次のように定義している。

cniht: A noble warrior; a member of the land-holding ruling class, owing military service to his lord and fighting on horseback; one who had received the status of knight from the king or other important knight.

ここでは既に「騎乗の武人」ということが明確にされている。⁽⁸⁾ それでは「騎乗の武士」即ち「騎士」という概念はいつごろどのようにあらわれたのであろうか。

3. 1 厳密に言うと「騎乗の武人」と「騎士」とは必ずしも一致しない。前者のように馬に乗って戦う人と言うだけのことであれば領主も臣下も野武士も「騎乗の武人」または「騎乗の戦士」である。「騎士」とは地域的には西ヨーロッパに限定され、歴史的には一つの社会階層をなしていくに至る身分の人々を指す。Agnes Gerhards は「中世初期の間は騎士 (chevalier) という言葉は存在しない。当時のラテン語文献においては milites (兵士) という言葉だけが問題となる」と言っている。⁽⁹⁾ しかし歩兵にくらべて騎兵の役割は11世紀以後増大してくるし、特に火薬の使用以前は、騎乗兵は弓を放つ

か否かとは拘わらず戦場の最重要人物であった。それに馬や鎧、馬具など高価な付属品を調達するのに多大な費用がかかったであろうから、そのような兵士は領主などスポンサーを持つか、金持ちあるいは貴族の子弟である必要があるようになったであろうことは当然考えられる。このような騎乗戦士は11世紀から13世紀の十字軍遠征で特に活躍した。William H. McNielは彼らのことを次のように記述している。⁽¹⁰⁾

レヴァントのギリシャ人、トルコ人、アラブ人に対して、西方の異国人の侵入が始まり、その数が増大し、これまでにない役割を演ずるにいたったのは、およそ1050年以後のことである。この新来者たちの中でとくにめだつのは、北西ヨーロッパのロワール川、ライン川間の地域から来た騎士、つまり職業的な戦士たちであった。

3. 2 上記のような戦士が中世のいわゆる「騎士道の華」といわれる模範を示すようになるのである。騎士とは「騎乗戦士」であることの他に「騎士」という身分と「騎士道」をわきまえた人、という付帯事項がつくのである。前者のほうは3.1で述べたように経済的な理由もあり、また社会制度として、Grant Udenが、「ヴァイキングが去ってヨーロッパ社会が形成された。社会的分業のシステムが整い、武力を占有する社会集団としての騎士が、聖職者、農民、町人とともに姿を現す11世紀のことである。」と述べているように、⁽¹¹⁾ 徐々に確立され、次第に下級貴族に組み込まれていったから、比較的容易にその概念がわかる。

1.0で下級貴族としての「騎士」にふれたのでその所をここで敷衍することにする。豪族や大領主を北歐式にearlと呼んだり、後のノルマン貴族をbaronと呼んだりはしたが、peers, aristocrats, noblesなどの貴族の呼称には法律的規定はないので騎士の属する下級貴族とそうでない貴族の間の区別ははっきりしているわけではない。しかしGerhardsは下級貴族としての騎士について次のように言っている。

13世紀に貴族と騎士の2つの概念は混じり合ったが、王、公、伯などの上層貴族と下流階層である騎士たちは区別され続けた。…彼らは軍事的存在であり、地主的存在でもある。12世紀中頃までには、彼らは軍職を独占し、大半の土地を所有するかその権威のもとにおく。とはいえ、無一文の成員（貧しい騎士達）もいないわけではない。⁽¹²⁾

貴族といえば中世では王を頂点とした血族親族、他に高位の聖職者があっただろうし、後代では都市の新興階級も含んで複雑な成り立ちをしているので、その中を更に上級下級と区別しようとするのが本論の主旨ではない。騎士身分では、父や領主などスポンサーさえいれば、不動産、動産の所有量はさほど問題とならなかつたであろうことは想像できる。

イギリス独自の knights of shire (州の騎士) は13世紀頃生まれたが、騎乗の戦闘の他に宮廷と地方行政を結ぶ官吏の役も果たしたという。兵役義務も代納で免れ得たので、そうなれば単なる政府の高官、地方代表の貴族の称号であった。また、イギリスでは騎士の身分は世襲ではなく、貴族の中でも下級のほうの従男爵 (baronet) の爵位相続人は成年に達すると騎士に叙任される資格を持つ、ということになっていて、19世紀末までは叙任を請求する動きもあったという。

騎士の叙任式は中世絵画のモチーフとしてしばしば取り上げられ、雅やかなイメージを喚起する。これと関連して、次に「騎士」と「騎士道をわきまえている人」というその付帯事項について考えてみよう。これは3.1でふれたように、十字軍などを派遣する際、カトリック教会がその軍事行動を容認どころか奨励したことに関連する。軍事行動にもカトリック的道德基準が適用されたのである。異教徒と戦うべく結成されたエルサレムの聖ヨハネ救護院の騎士団やのちに Templars と呼ばれるソロモンの神殿騎士団、のちのドイツ騎士団、イギリスのガーター騎士団などで、勇気、服従の徳のほか、女

子供、病人の保護などの徳目が重んじられるようになったといわれる。そしてそのような徳をそなえた武人が物語や武勲詩、恋愛詩の中で騎士の鑑、あるいは騎士道の華として讃えられた。アーサー王物語やクレティエン・ド・トロワの物語が産出するようになったゆえんである。

4. 1 以上 OE *cniht* が ModE *knight* となり、そのナイトが「騎士」として貴族の一端に列せられるありさまをイギリスの場合を中心としてみてきた。最後に *knight* の日本語訳である「騎士」の「騎」の字が「騎乗」している人を指すことをもう一度思い起こしてみたい。OED にも *knight* は a mounted and well-armed man とあるので、この日本語訳は騎馬戦士をあらわすのにぴったりの語である。事実、藤堂明保編の「漢和大事典」にも騎士は「馬に乗っている兵士」「ヨーロッパの中世の武人の一階級、ナイト」と定義されている。⁽¹³⁾ そこには 1.1 で見たような *knight* が OE *cniht* であったころの「若者、小姓」の意味はない。一方、江戸時代に日本に入った英語を調査した「江戸時代翻訳日本語辞典」という本では *knight* は「忠義連中」と訳されている。定義は「智勇ノ士、王命ヲ受ケ国ノ為メ民ノ為メニカヲ尽クスナリ」としてある。⁽¹⁴⁾ これは歴史的な、広い視野に立った説明的定義で興味深い。Knight を「騎士」という現代の訳語に影響されてひたすら騎乗ということにこだわって見てきたが、このように広い意味で主君や国の為に戦う人と見るべきだ、ということを貴重な事を江戸時代の人に教えられた。

註

- (1) Murray, A. H., et al., *The Oxford English Dictionary* (=OED), Clarendon, Oxford, 1888-1933. s.v. *knight* I-1 (Obs.).
- (2) OED, s.v. *knight* I-2.
- (3) Bergen Evans, "Couth to Uncouth and Vice Versa," Philip L. Gerber ed., *The Growth of English*, 成美堂、1984, p. 83.

- (4) Walter W. Skeat, *An Etymological Dictionary of the English Language*, Oxford at the Clarendon Press, 1882, s.v. knave.
- (5) Skeat, s.v. knight, and Eric Partridge, *Origins: A Short Etymological Dictionary of Modern English*, Routledge & Kegan Paul, London, 1959, s. v. knight.
- (6) *OED* s. v. knight.
- (7) Partridge, s. v. knight.
- (8) Hans Kurath and S. M. Kuhn, *Middle English Dictionary (=MED)*, University of Michigan, Ann Arbor, Michigan, 1954-, s.v. knight.
- (9) Agnes Gerhards ed., 池田健二訳「ヨーロッパ中世社会史事典」、藤原書店、1991年、p. 78.
- (10) Grant Uden 編 堀越孝一監修「西洋騎士道事典」原書房、1968年、p. 353.
- (11) 同上.
- (12) Gerhards, p. 80.
- (13) 藤堂明保編「漢和大事典」学習研究社 1977年、「騎士」の項。
- (14) 杉本つとむ編「江戸時代翻訳日本語辞典」早稲田大学出版部 1981年、knight の項と p. 962.